教育実習に関する研究―教育実習を通した意識の変化について

―教育実習生に対する意識調査からの考察―

Research on Teaching Practicum
About Changes in Awareness through Teaching Practicum
―Considerations from the Awareness Survey on Student teachers―

粟　井　康　裕
Yasuhiro AWAI

Ⅰ　はじめに

教育実習は，学生がこれまで学んできた教育に関する基礎的知識・技能を実際の教育現場で総括的に活用し，指導教員による指導の下，児童とのふれあいを通じて実践的指導力の基礎を修得する重要な場である。さらに，教育実践に関わることを通して将来教員となる上での能力や適性を考えるとともに課題を自覚する貴重な機会でもある。昨年度から教育実習を担当し指導を進める中で，学生に対してその大切な意義を意識化させることの難しさを感じていた。教育実習以前は模擬授業の実践もどこか形式的であり，対象となるはずの児童について意識されてはいなかった。また，事例研究等教育に関する議論においても，一般論に終始し，具体的な深まりのあるものにはならなかった。しかし，教育実習を終えた学生は教職に対しての意識が大きく変化していた。教育実習という経験により，学生が語る言葉に子供の姿が浮かぶようになっていた。

本稿では，「小学校教育実習」を受講する学生が教育実習前後でどのように意識に変化が生じたのか，また，どのような教育実習での実践や経験が変化をもたらしたのかを意識調査をもとに整理する。さらに，調査結果から今後の小学校教育実習の指導改善への手がかりを得ることを目的としている。

さて，教育実習の事前指導，事後指導はどんな目標のもと行われるものなのか。平成29（2017）年11月，「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」において教職課程で共通的に身につけるべき学修内容がとりまとめられた[(1)]。その中の「教育実践に関する科目」において，事前指導・事後指導に関する事項が次のように記されている。

一般目標：事前指導では教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高め，事後指

導では教育実習を経て得られた成果と課題等を省察するとともに，教員免許取得までに習得すべき知識や技能等について理解する。これらを通して教育実習の意義を理解する。

到達目標：１）教育実習生として遵守すべき義務等について理解するとともに，その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加することができる。

２）教育実習を通して得られた知識と経験をふりかえり，教員免許取得までにさらに習得することが必要な知識や技能等を理解している。（下線は筆者）

このように事前指導においては，実習内容の理解や実習中における留意事項だけでなく，実習に向けた意欲も強調されている。わずか３週間という短い実習期間をより充実させるためにはスタートが大切である。教育実習に対する意識をより高めるため，教育実習生の視点で教育実習を捉え，次年度の講義内容や事前指導に生かすことが重要になると考える。

Ⅱ　研究方法

１　教育実習前

⑴　調査対象：令和５年度教育実習を控えた本学児童教育学科児童教育コース２年生15名である。

⑵　調査時期：教育実習の事前指導の場で，質問紙に回答してもらう。

⑶　調査内容：①教職に対する志望度についての質問；教員になりたいかどうかについて，「はい」「いいえ」「検討中（未定）」の３段階で回答を求めた。②教育実習の不安について「ある」場合の内容等について記述回答を求めた。

２　教育実習後

⑴　調査対象：令和５年度教育実習を終えた，実習前も同様に意識調査を行った本学児童教育コースの２年生15名中14名である。（１名未実施）

⑵　調査時期：教育実習の事後指導の場で，質問紙に回答してもらう。

⑶　調査内容：①教育実習の充実度について，「はい」「おおむね」「いいえ」の３段階で回答を求めた。②教職に対する志望度についての質問；教員になりたいかどうかについて，実習前と同様の回答を求めた。また，「教育実習の前と後で，教職に関する考え方や教職に対する気持ちにどんな変化があったか」について記述回答を求めた。③「教科内容の知識・技能」「指導案作成」など14項目について，教育実習の中で特に学んだこと，課題となったことを「はい」「いいえ」で回答を求めた。さらに，「あなたが一番苦労したことは何か」について記述回答を求めた。④「あなたが教育実習前に学んでおけばよかった」と

思うこと，「教育実習に関して講義内容や活動で重点的に取り組むべき」と思われることついての記述回答を求めた。

Ⅲ　分析結果

1　教育実習前の教員志望の割合（%）について

表１には，「あなたは教員になりたいと思っていますか」という質問について，「はい」「いいえ」「検討中（未定）」の３段階で回答した割合を就職志望者，編入学志望者別に表した。

表１　実習前の教員志望の割合（%）

	は　い	いいえ	検討中（未定）
就職志望者	20.0	0	0
編入学志望者	26.7	0	53.3
計	46.7	0	53.3

この結果をみると，就職志望の学生は100%の教員志望であるが，編入学志望の学生の多くが教員志望について「検討中あるいは未定」となっている。本学は國學院大學傘下の短期大学部として，北海道キャンパスの役割を担っている。大きな特徴としては卒業生の７～８割が國學院大學等に編入する。そのため，このように就職に関して明確な将来の方向性が表れていない状況にあると考えられる(2)。故に，教育実習に対しても意識が低い傾向にある。

2　教育実習前の不安について

実に９割以上の学生が実習前に不安を抱えていた。具体的には，「子供たちにわかりやすい授業を行うことができるか」などの教科指導，「どのように児童に注意すべきか」「けんかやトラブルへの対応」などの生徒指導，「子供たちとうまく関われるか」などの人間関係づくりや子供たちとの関わり，「朝起きられるか」「体調を崩さないか」などの生活面など多岐にわたって不安をもっていることが窺える。まとめると，表２のようになる。

表２　実習前不安に感じていること　※複数回答あり

内容項目	割合
指導案や教材作成などの授業づくり，授業準備	33.3%
わかる授業の進め方や発問の仕方，ICT機器の有効な使い方などの教科等の指導	33.3%
子供たちとの関わり方やコミュニケーションのとり方など人間関係づくり	33.3%
朝起きられるか，体調を崩さないかなどの自身の生活	33.3%
注意の仕方やけんか・トラブルへの対応などの生徒指導	20.0%
教育実習への全体的な不安，漠然とした不安	13.3%

3　教育実習の充実度について

教育実習前には不安を抱えていた学生であるが，表３の通り，実習後の調査では，「充実していたか」の問いに対し「はい」と回答した学生が100％と学生一人一人にとって充実したものになっている。令和４年度も同様の質問を学生[3]に対し行ったが，「はい」と回答した学生が88.9％と今年度同様に高い数値を示していた。このように充実度の割合が高い数値を示している要因は主に次の二つではないかと考える。

一つは教育実習校の教員の実習生に対する寄り添った丁寧な指導である。それまで抱いていた不安感が指導教諭の指導や支援，助言等によって払拭されている様子や，指導教諭と試行錯誤しながら実習を進め，忙しいながらも充実した実践の様子が実習日誌から読み取ることができる。そしてもう一つは，子供たちとの心に残る教育活動やふれあいである。このことについても実習日誌をはじめとする様々な記録から把握することができる。

なお，本学の実習先は一部の母校実習を除き滝川市内の各小学校となっている[4]。これまでの実習生受け入れの実績からそのノウハウが確立されている。さらに，教育実習説明会[5]を開催し，講義における教育実習の事前指導内容や受け入れに関わる諸事項について協議・意見交換を実施し，より良い教育実習となるよう共通理解を図っている。

表３　教育実習の充実度の割合　　※（　）内は令和４年度の数値

は　い	おおむね	いいえ
100％（88.9％）	0％（11.1％）	0％（0％）

4-(1)　教育実習後の教員志望意識の変化について

表４には，「あなたは教員になりたいと思っていますか」という質問について，実習前と同様に「はい」「いいえ」「検討中（未定）」の３段階で回答した割合を就職志望者，編入学志望者別に表した。なお，（　）の中の数値は事前回答との割合の変化を表したものである。

表４　実習後の教員志望と変化の割合（％）

	は　い	いいえ	検討中（未定）
就職志望者	14.3（−5.7）	0（0）	7.1（**7.1**）
編入学志望者	42.9（**16.2**）	0（0）	35.7（−17.6）
計	57.1（**10.4**）	0（0）	42.9（−10.4）

就職希望の学生の回答に一部変化があったが，これは教職以外の公務員試験にも合格したことによるものである。編入学希望の学生については教育実習を経験することにより，教員

志望の割合が増加している。この結果をみると教育実習が進路決定に影響していることがわかる。さらに，記述回答から学生の意識変化の詳細を読み取ることができる。

4-(2) 教育実習前・後での教職に関する考え方（気持ち）の変化について

学生の意識変化について「教育実習の前と後で，教職に関する考え方や教職に対する気持ちにどのような変化があったか」という質問に対する自由記述の回答をもとに3つのカテゴリーに分類して整理した。（記述式回答部分の下線は筆者）

① 教職のやりがいや魅力

・実際に子供たちと関わったことで，小学校教諭の魅力がさらに増した。子供の笑顔は，本当にやりがいへとつながると感じた。
・「大変な仕事なんだろうな」と不安があったが，やりがいのあるすばらしい仕事だなという気持ちの方が上回った。
・休む暇もなく大変だったが，一つ一つの出来事が充実していた。そして，その先にある児童の姿や笑顔にやりがいがもてた。児童の力はすごいと感じた。
・教育実習が始まって2週間目の頃，指導案作成で何回もやり直されたり，授業が思うようにできず児童が理解していないのが伝わったりして教師には絶対なりたくないと感じていたけど，最後の何回かの授業実践で児童から「分かりやすかった」「先生の授業好き」と言われて嬉しく，やりがいを感じることができた。
・朝から夕方まで休まる時間はないが，児童と話していたり，見ていたりすると元気がもらえてすごく癒やしになった。
・教職の魅力や楽しさが体感的に理解でき，さらに教職の難しさ，大変さも理解できた。
・子供に囲まれることを監視の目と捉えており，プレッシャーに感じていたが，予想以上に人間関係がうまくいって，教師という仕事自体悪くないのではと思い，気持ちは前向きになった。
・教職の魅力や楽しさが体感的に理解できて，さらに，教職の難しさ，大変さも同じく理解できた。
・正直教育実習に3週間行くのは長いなと思っていた。しかし，行った後は，3週間があっという間で，もっと行きたいと思うほどであった。自身の成長につながると感じたし，楽しかった。

② 教育実習がもたらす進路の変化

・（教職の魅力や楽しさが体感的に理解でき，さらに教職の難しさ，大変さも理解できた。）その上で，私は終わった後の方がより教職に就きたいと考えていて，「夢」だったものが「決意」に変わったような感覚をもっている。
・教師を目指す気持ちは変わらなかったが，実習を通じて自分の将来像が鮮明になった。
・大変さも感じたが，改めて教員はいいなと思った。
・実習前は中学校の先生になりたいと思っていたが，実習をやっていくうちに，小学校の先生って素敵だなと心から思った。小学校の先生になってみたい。
・教師になる思いへの迷いは４月当初に比べてなくなった。それは，日々自分が進路について悩み，考える中で次第に迷いがなくなってきたのと，教育実習で教師への思いがより強くなったことが理由にあると思う。
・実習前は少し不安があり，正直やりたくない気持ちがあったが，実習を行ってみて楽しいと思うことが多くあり，教師になるのもありだと思った。

③ 教師の職務に関すること

・授業実践は学級経営と深い関係があり，研究というものが終わらず，続いていくということを考えるようになった。
・自分が思っていたよりも学校現場は大変なことが多かった。

まず，「教職のやりがいや魅力」のカテゴリーについてであるが，実習前は「うまくやれるだろうか」「わかりやすい授業ができるだろうか」といった漠然とした不安が，実習を行うことによって，職務の難しさや大変さを感じたものの，それにも増して達成感や充実感を得ることができている。はじめはうまくいかなかった授業実践，児童との関係が指導教諭の指導・助言のもと，指導案の作成・検討，教材研究，児童の実態把握・関係づくり等に日々努力することにより，授業実践や児童との関係性が少しずつ改善されてきたものと考えられる。その手応えや実習生自身の成長，児童の「できた」「わかった」の声や笑顔に教職のやりがいや楽しさを実感したものと考える。

次に，「教育実習がもたらす進路への変化」のカテゴリーである。表４の数字では小さな

変化であったが，文章記述を見ると「夢が決意に」「将来像が鮮明に」など進路の選択がより現実味を帯びてきている。また，國學院大學へ編入し，中学校・高等学校の教員免許を取得し，中学校・高等学校の教員を目指していた学生が，教育実習を通して小学校教員のよさに気づき進路を変更したり，改めて小学校教員を目指す意思を固めたりと将来の進路を明確にしている。学生によって教員への志望度は変わるが，あまり教職への道を考えていない学生にとっても，心境の変化が窺えた。

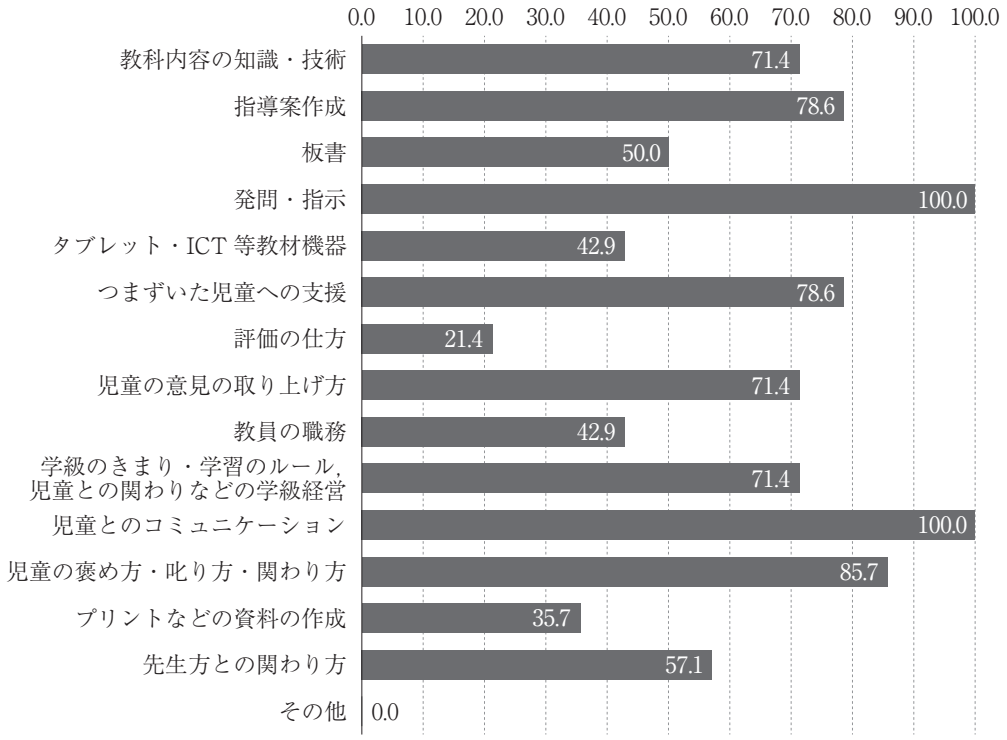
最後に，「教師の職務に関すること」のカテゴリーでは，「授業実践と学級経営の深い関係性」「研究（教師の職務）に終わりがなく，継続していくこと」「大変な職務であること」など職務の難しさ，大変さを改めて実感している。

5-(1)　教育実習で特に学んだことについて

グラフ１は「教科内容の知識・技能」「指導案作成」など14項目の中で，“教育実習で特に学んだ”と思われたものについて「はい」と答えた割合（%）を示したものである。

高い割合を示した項目は，「（授業における）発問・指示」「児童とのコミュニケーション」

グラフ１　教育実習で特に学んだことについて（%）　※複数回答



「児童の褒め方・叱り方・関わり方」「指導案の作成」「つまずいた児童への支援」「教育内容の知識・技術」「児童の意見の取り上げ方」「学級のきまり・学習のルール」であった。その中でも,「児童とのコミュニケーション」「児童の褒め方・叱り方・関わり方」「児童の意見の取り上げ方」など普段経験できない児童と直接関わることに関する事項がとても高い割合となっている。

また,「発問・指示」「指導案の作成」「つまずいた児童への支援」「教育内容の知識・技術」「児童の意見の取り上げ方」など授業づくり・授業実践に関する事項についても同様に高い割合になっていることが読み取れる。授業実践については，これまでも教科指導法などの講義の中で扱い学修を積み重ねているが，実際に目の前の小学生を対象とした授業づくりは講義では得ることのできない貴重な学びとなっている。児童役の学生を相手にした模擬授業ではあまり意識できなかった学級の実態や発達段階，児童一人一人の特性を考慮した授業構成，児童にとってわかりやすい発問・指示の工夫，そして，一人一人の児童が主体的・協働的に取り組み，本時のねらいが達成できるような授業展開，児童を思い浮かべながらの授業づくり・授業実践は学生にとって大変貴重な学びとなったことがわかる。

全体的にどの項目も高い割合を示しており，実習の活動・実践の一つ一つが学生にとって大切な学びとなっていた。

5-(2) 教育実習で課題となったことについて

グラフ２はグラフ１と同様の14項目の中で，“教育実習で課題となった”ことについて「はい」で答えた項目とその割合（%）を示したものである。

高い割合を示した項目は,「発問・指示」「児童の意見の取り上げ方」「指導案の作成」「板書」等授業づくり，授業実践に関する事項である。現在学校教育では「主体的・対話的で深い学び」への授業改善が求められている。実習生にとって質の高い授業をつくることは難しいことではあるが，少しでも児童にとって「わかる」「楽しい」授業に近づける必要があると認識することにより，課題が生まれていると考えられる。さらに，児童に伝えるための「発問・指示」，学習内容が整理された見やすいわかりやすい「板書」，児童に積極的に関わり，考えや意見を活かす「児童の意見の取り上げ方」「児童への関わり方」など授業の善し悪しに通じるスキルが課題であったことが窺われる。

5-(3) 教育実習で一番苦労したことについて

表５は５-(2)の結果と関連した「教育実習で一番苦労したこと」の自由記述の内容をカテゴリーと割合（%）にまとめたものとなる。

グラフ２　教育実習で課題となったことについて（%）　※複数回答

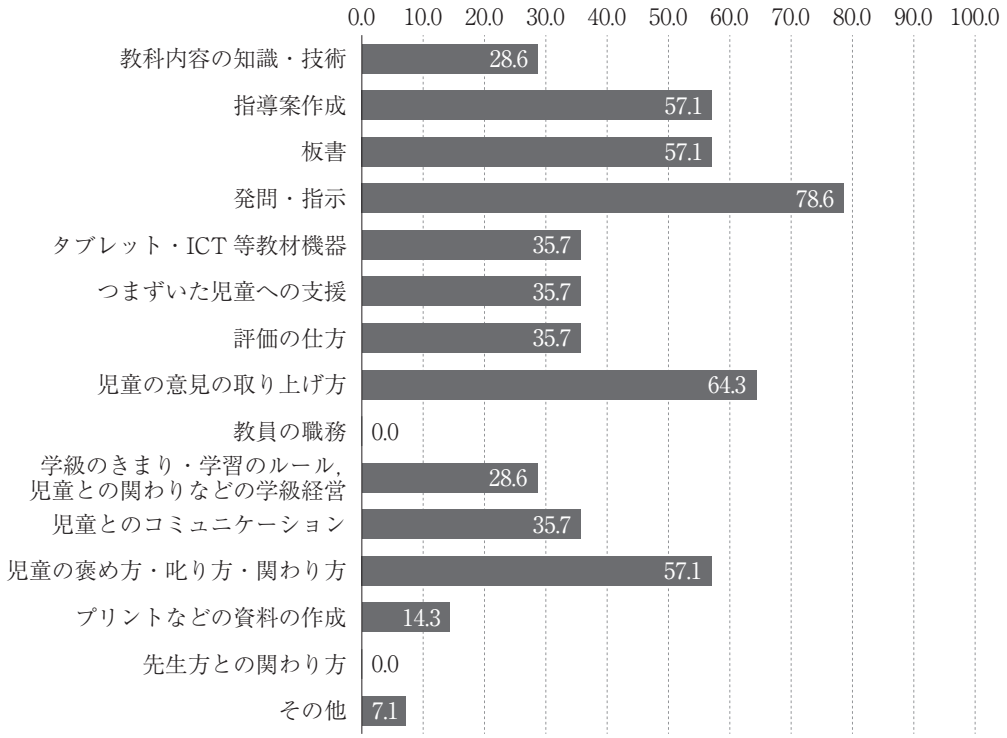


表５　実習で一番苦労したことの内容項目と割合（%）

内容項目	割合（%）
発問に関すること	28.6
授業づくり，授業改善の方策に関すること	28.6
指導案づくりについて	21.4
ICT機器の活用	7.1
その他	14.3

「発問に関すること」の具体的記述は次の通りである。「丁寧に発問しないと子供たちは反応しないため，どうすれば伝わるかを考えることに苦労した」「小学１年生へわかりやすくしっかりと伝えるための発問の難しさ（に苦労した）」「発問の仕方。模擬授業では学生を相手にするためスムーズにいくが，実習では思っている何倍も丁寧に，わかりやすく発問を考えなければならない」など小学生への伝えることの難しさや模擬授業との違いが指摘されている。「授業づくり，授業改善の方策に関すること」では，「わかりやすい授業をどうつくり上げていくか」「児童中心の授業展開をどのようにするとよいか」「タイムマネジメントにつ

いて」が挙げられている。「指導案づくりについて」は「指導案の構成。考えれば考えるほど悩んでしまった。指導案づくりは深く，切りがないと思った」「指導案づくり。自分のつくりたいと思っていた授業が未熟なもので，自信がなくなりそうになったこと。先生方から意見をたくさんいただいたが取り入れたいところが多すぎて，さらに迷ってしまった」「指導案の作成。自分がするべきこと，授業で一番大切なことはどこかなど，指導教諭とたくさん話をした」と，より良い授業をつくり上げるための苦労が記されている。「ICT機器の活用」に関する記述は「ロイロノート・スクール（タブレット端末アプリ）での資料作成」[6]である。この学生については，指導教諭（実習校）が積極的に活用しているアプリを自身の授業実践にも高い頻度で活用している。「その他」では，「音楽や体育など，慣れない科目の授業実践にとても苦労した。特に，道徳の授業は本当に難しかった」「全員となるべく平等に関わることが難しさ」という記述がある。

6-(1)　教育実習前に学ぶべきこと

表6は「あなたが教育実習前に学んでおけばよかった」と感じている事柄について自由記述で回答したものをもとにカテゴリー別に整理して，その項目と割合（%）をまとめたものである。

表6　実習前に学ぶべきことの内容項目と割合（%）　※未記入者あり

内容項目	割合（%）
ICT機器の活用について	35.7
児童との関わり方について	35.7
漢字の書き順等について	14.3
教師としての振る舞いついて	7.1
その他	14.3

具体的な記述内容は次の通りである。「ICT機器の活用」については「電子教科書での授業実践。私が配属になった学級では，毎時間使っていた」「自分は使っていないが，タブレット端末操作」「ICT活用（何度かタブレットを使った授業をさせてもらい，なんとか実習中に使えるようになった）」「ICTの活用を実習前にもう少し学んでおくべきだった。思った以上にICT活用が進んでいた」などがある。ICT機器の教育実践への効果的な活用は本学としての課題と認識している。教育実習においては指導教諭の授業観察で活用の場面を参観するが，すぐに実習生自身の授業実践に取り入れることが難しいため，「課題となったこと，苦労したこと」では数値が突出していないものの記述回答では意見が多くなったと考えられ

る。「児童との関わり方について」は「子供同士のけんかの対処法」「児童に指導が必要なときの叱り方」「子供と目線を合わせること」などである。このことは，書籍などの理論だけでは解決できないところがある。理論とともに多くの経験の中から身につけていくものであるが，普段の生活の中で小学生との接点がないためスキルを磨くことは難しい。

6 -(2) 教育実習に関する講義や活動の充実

表７は「教育実習に関して講義内容や活動で重点的に取り組むべき」と思う内容について自由記述で回答したものをもとにカテゴリー別に整理して，その項目と割合（%）をまとめたものである。

表７　教育実習に関する講義や活動の充実の内容項目と割合（%）※未記入者あり

内容項目	割合（%）
ICT機器の操作・活用について	35.7
模擬授業に関すること	28.6
指導案・発問について	14.3

具体的な記述内容は次の通りである。「ICT機器の操作・活用について」は，「ICTを学べたら，実習中に活用できたと思う」「ロイロノート（タブレット端末操作）についての講義があった方がよいと思う」などがある。６-(1)の回答と重なるところがあるが，学校現場ではICTの活用が必須になっており，実習の授業実践を行うためにはタブレット端末の操作が事前にできなければならない状況にある。教育実習を行う前に講義で学んでおきたいという気持ちが込められている。「模擬授業に関すること」については「自分も含めて，もっとリアルな小学生をイメージし演じて模擬授業を行うと力になっただろうと感じた」「模擬授業の児童役の意識の低さ」「児童役がなりきらなければ意味はない」などである。やはり本物の児童を前にした授業実践・教育活動にはかなわない。少しでも近づけるため，模擬授業では授業者だけだはなく，児童役も真剣に行う必要がある。児童役が中途半端な気持ちで模擬授業に臨むようであれば，その実践は学校現場では何の役にも立たないということである。

Ⅳ　考察

これまでの分析結果を踏まえて令和５年度の小学校教育実習における実習生の意識の変化を整理し，この調査結果を今後の小学校教育実習指導等，学生の学びや進路に活かす方策を考察する。

1　教育実習の重要性

教育実習前と後で教員志望への度合いが変わることが今回の調査から読み取ることができる。３週間というわずかな期間ではあるが実際に児童を指導・支援し，ともに活動する中で児童との関わりに楽しさを感じ，児童の成長や変容に喜びを見いだすことにより，教職のやりがいを体感したからだと考える。この教育実習の重要性をこれから実習に向かう学生に伝えることが実習への意識を高め，より良い実習のスタートにつながると考える。

さらに，効果的な実習を進める鍵となるのは実習校との連携である。これまでも教育実習事前説明会のほか，全ての実習先に実習活動の参観・実習生の指導のために訪問しているが，その機会を有効に利用し，学校現場の声をしっかりと受け止め，学生の指導に活かすことが大切と考える。そのことが互いの信頼関係を高め，連携が強化される。

2　学校現場で使える実践演習

学生の意識調査では実習後において“児童を意識する”ということが大きな変化であった。児童にとってわかりやすい課題の設定，発問・指示，支援…“児童はどんな疑問をもつだろうか”，“児童にとってどこがつまずきやすいか”など常に児童を意識しながら模擬授業などに取り組むことは生きた学びとなる。模擬授業における児童役もその意識をもつことが大切と考える。しかし，実習前にいくら口頭で伝えようとしてもうまく学生には伝わらない。実際に小学生と関わらなければその意識は育たない。そのため教育実習以前にできるだけ小学生に関わる機会をもつように設定し，参加を促す必要がある。これまでも小学校における長期休業中や放課後の学習ボランティア活動，小学生を対象とした地域行事等のボランティア活動に積極的に参加する学生もいるが，残念ながらすべての学生が参加している状況ではない。小学生に関わるボランティア活動の重要性を伝え，小学校と学生を積極的につなげることが課題となる。

3　ICT機器の活用

コロナ禍を経て一人一台端末の急速な普及が進み学校現場のICT環境が大きく変化している。タブレット・ICT機器は学習活動必須の道具となり，普段の授業においても頻繁に活用されている。

また，国では新学習指導要領を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や，特別な配慮を必要とする児童生徒等の学習上の困難低減のため学習者用デジタル教科書を制度化した(7)。教員の働き方改革にも関わり急速に利用が進むことが予想される。デジタル教科書についてもその活用が実習生に求められてくると思われる。

現状では教育実習のわずかな期間でタブレット端末の使用方法を学びながら，実際の授業実践に活用するということは難しく，ICT機器の使用は書画カメラや教科書会社等のデジタルコンテンツの活用に留まっている。

講義の中でタブレット端末の操作だけではなく，教科指導における効果的なICT機器の活用まで踏み込むには時間的な制約などがあり難しいところではあるが，ICT機器の活用を視点とした授業研究会への参加等を含め，様々な方策を考えていく必要がある。

Ⅴ　終わりに

本研究を振り返ると，実習生全体として教育実習の経験が教職に対する意識の変化をもたらすことを読み取ることができた。しかし，学生一人一人と話を交わすと，教職に対する思いや考えに個人差がある。教職に魅力は感じるものの，社会性を身につけ，視野を広げるために教職以外の仕事に就き，社会経験を積んでから改めて教職を目指そうと考えている者，教職への魅力は感じているが，自分に教師となる資質・能力が備わっているか，本当に自分に合っているかという悩みを抱き，不安を漏らす者もいる。今後，教育実習の充実が教職への適性認知や教育的実践力保有の認知などに影響するかを検討する必要がある。また，今回の調査だけではなく継続して実施し，結果を比較することで分析の精度を高める必要があると考える。

近年全国的に教員採用試験の受検率の低下が課題となっている。北海道教育委員会の資料によると北海道においても同様の傾向がみられ，「令和６（2024）年度北海道教員採用試験（小学校）」の倍率は1.8倍と発表された。８年前の平成28（2016）年度北海道教員採用試験（小学校）では3.8倍であった倍率が徐々に低下し，現在は当時の倍率の二分の一まで落ち込んでいる。このような教員採用試験の倍率減少は教員不足にも直結している。文部科学省の調査では令和３年５月１日の時点で全国の小学校における教員の不足数を979名（不足率0.26％）と公表している[(8)]。このことはこれからの学校の運営や児童の教育活動にも悪影響を及ぼす危険性がある。国はこの状況を国の未来を左右しかねない危機的な状況にあるとして，社会全体で一丸となって課題に対応する必要があるとしている[(9)]。

もちろん，国が先頭に立って推進しようとしている教員の働き方改革（業務改善・業務の見直し）は教職の魅力づくりとして重要な部分である。確かに，外部から学校を支援するスクールカウンセラー等の専門人材，部活動指導員，ICT支援員，特別支援教育支援員等の配置やコミュニティ・スクールを核とした“地域とともにある学校づくり”は教師が本来担うべき業務に専念できる環境づくりに大いに役立つ。それと同時に“やりがい”という面からの教職に対する肯定的なイメージをもたせることが大切になる。

大牧（2022）は『教員養成で育む実践的指導力』の中で次のように記している。

> 教員養成大学に臨むことは，（中略）体験的，臨床的な学びを充実してほしいということである。子どもと一緒に遊ぼうとする探究心，子どもと一緒に遊ぼうとする気力・体力，学級経営につながる臨床的な学び，教員にあこがれをもつ機会の充実（教育実習，ボランティア活動等）などである。

教員養成の現場として，より充実した教育実習を含め，体験的，臨床的な学びを深めたい。また，貴重な教育実習実践交流の機会である事後報告会を充実させ，互いに見ることのできない実習の状況を把握するとともに，情報交換を積極的に行い，自身の経験と比較することで，実習を客観的に捉えさせたい。そして，しっかりと振り返り，自身の指導観を見直すような事後指導を推進し，学生の教員志望度向上につなげたい。

注

(1) 文部科学省「教職課程コアカリキュラム」(2017)「教育実践に関する科目　(1)事前指導・事後指導に関する事項」
(2) 昨年度（令和３年度）の本学児童教育学科児童教育コースの就職，編入学の実績は次の通りである。〈國學院大學72.2%，他大学5.6%，就職22.2%〉
(3) 令和４年度の教育実習生は15名，昨年度も今年度同様の意識調査を行っている。
(4) 滝川市内には６校の小学校があり，２～３名教育実習生を受け入れていただいている。複数名での実習ということで，相談したり，交流したりすることができ，心強く感じている学生も多い。
(5) 教育実習説明会は，例年教育実習前６月下旬に市内小学校校長，実習担当教諭，教育委員会指導参事（指導主事）と本学小学校教職課程担当教員で実施している会議である。
(6) ロイロノート・スクールとは，クラウド型授業支援アプリである。滝川市内の小学校全てに導入されている。その活用の一つとして情報や考えをまとめた“カード”を作成し，簡単な発表を行うことができる。
(7) 学習者用デジタル教科書を制度化する「学校教育法等の一部を改正する法律」等関係法令が平成31年４月から施行された。これにより，これまでの紙の教科書を主たる教材として使用しながら，必要に応じて学習者用デジタル教科書を併用することができることになった。
(8)「教師不足」に関する実態調査（令和４年１月31日　公表）文部科学省
文部科学省が「教師不足」について，67都道府県・指定都市教育委員会及び大阪府豊能地区教職員人事協議会（計68）を対象として，実態調査を行ったもの。ここでいう「教師不足」は，臨時的任用教員等の確保ができず，実際に学校に配置されている教師の数が欠員を生じることを指す。
(9) 令和５年８月中央教育審議会の特別部会（部会長千葉大学教育学部　貞広斎子　教授）は，教員の働き方をめぐり，危機的状況にあり社会全体で改善に取り組むべきだとする緊急提言をまとめている。

引用・参考文献

大牧眞一他　北海道教育大学編（2022）『教員養成で育む実践的指導力』大学教育出版p54

桶谷守・小林稔・橋本京子・西井薫　編（2016）『教育実習から・教員採用・初任期までに知っておくべきこと』教育出版
玉川大学教師教育リサーチセンター編（2020）『教育ガイド～夢に向かって自分で考える力を生み出す～』時事通信社
石橋裕子・梅澤実・林幸範（編著）（2019）『小学校教育実習ガイド』萌文書林
三田部勇・吉田武男（編著）（2023）『教育実習』ミネルヴァ書房
竹村精治・菅井　悟・高橋伯也（2017）「教育実習生の現状と課題―教育実習校による評価を通して―」東京理科大学教職教育研究実践報告
香川大学教育学部付属教育実践総合センター（2012）「教育実習をめぐる現状と教育実習を通した学生の意識の変容　教育実習を中心とした学部と付属学校園との連携による支援の在り方に関する研究プロジェクト」香川大学教育実践総合研究報告
中野靖彦（2000）「教育実習に関する研究―実習前後の心理的変化について」愛知教育大学研究報告
加藤　卓（2020）「教育実習での授業実践に必要な指導内容―算数科指導法と教育実習指導の改善を通して―」東北学院大学教育学科論集